

乳がんの検診とその動向

自己触診で乳がん予防

山口 医院

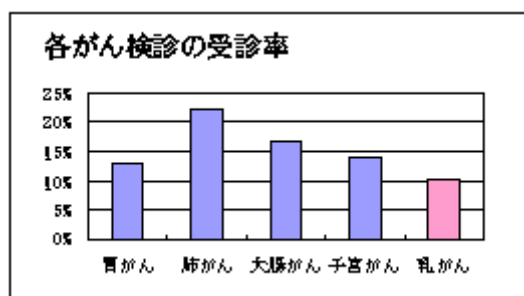
山口 進久 先生

乳がんは、女性にとってほかのがんに比べて最も発症率が高く、30歳代以降、特に40～50歳代や閉経期前後の女性に多く見られます。要因としては、遺伝的なものもありますが、ほかにホルモンや初潮の時期、妊娠出産の有無や初産の時期、閉経後の肥満なども関係してくると言われています。

また、初期症状として、乳房のしこりや皮膚色の変化、乳房の変化、乳頭の変化、そして脇の下のリンパ節の腫れなどがあります。

乳がん検診は、1987年から老人保健事業として全国の市町村で実施されるようになり、2005年からは40歳以上の女性を対象に視触診の検診だけでなく、マンモグラフィ(乳房専用 X 線撮影)による検査も加えられて、小さなしこりも発見できるようになりました。

しかし、乳がん検診の受診率は年々減少傾向にあり、ここ数年の対象者の受診率は、その全体の約10%強に過ぎないのです(グラフ参照)。そして、日本では、1年間に約1万人が乳がんで亡くなっています。



乳がんは、自己触診でも発見が可能で、月経終了後7日目ぐらい、閉経後の女性は毎月決まった日に、仰向けに寝て親指以外の4本の指を伸ばした状態で合わせ、指腹で乳房全体をゆっくり触っていき、しこりがないかを探します。

定期的な検診を行うことも重要です。もし、検診で腫瘍が見つければ、早期治療を行うことで乳がんの大きさが約1cm 以下(早期がん)の場合は95%以上の確率で治っているのも事実です。

とにかく、月に一度の自己触診を行い、気になる症状が見つかった場合は、放っておかず、すぐに医師に相談・受診することが大切です。

そして、40歳未満の女性でも、しこりなどの気になる症状がある人は乳がん検診を必ず受けるようにしましょう。